



## 函館 → 札幌

3班 短食2の1,2

(小野, 甲斐, 門須, 皆良田)  
(今, 大津, 山本, 大仲)

7月18日(第4日目)

旅行も4日目から本格的である。本州を離れ、初めて北海道という未知の土地で一夜を明かした旅館に別れを告げ、先ず、函館市内遊覧に繰り出した。

北海道初の見物がトラピスチヌ女子修道院で、人家から少し遠さかつた丘陵にひっそりと、しかし、どっしりとした姿をみせている。礼拝堂まで見物できるそうだが、観光客が多くて、優しいまなざしの聖テレジアの像と力強い大天使聖ミカエルの像が立っている庭だけしか見せていただけなかつた。でも、木の緑、小さい白い花、赤レンガ、渋い緑の屋根、真白の像、尖んがった屋根に十字架、それだけで美しかつた。この上、観光客が少なくてアンジェラスの鐘の音でも響けば清らかな聖気を感じたであろうに、と残念に思いつつ、次の地、五稜郭に向つた。

敵の攻撃に不利なようにと考えられた星形の洋式の城で戌辰の役に榎本武揚が立て籠つた所。そこをさつと見学し、啄木が愛したと言われる立待岬へバスは行く。啄木の墓碑を窓ごしに眺め岬に出る。何も無い。唯、山と岩と海だけ。自然のまま。それだけに何か心休まる思いがした。心残りは函館山頂へ行けなかつたこと。遠く下北、津軽両半島の山影も望まれる所なのに濃霧の為、中腹までで、すごすごと引き返した。

函館はこれでお別れ。エルム号で札幌へ。この車掌さん、列車なのに丁寧な案内をして下さる。大沼、小沼の出入りの多い湖岸や沢山の小島が浮んでいるのが木々をすかして車窓から眺められる。写真を撮るのに一番眺めの良い所を教えて下さつたり、ある駅に十数分停車すると、「ホームに出て新鮮な空気を胸一杯、吸われては」とか、又、「ホームに出て屈伸運動などもいかがでしょう」とユーモアで親しみ感じるガイドは思い出に残る一つである。札幌に向かうこの辺から、ぐつと異国的になる。サイロ、大きな煙突のある赤や青の屋根、広い広い牧草地。牛や馬、羊があちこちで草を喰んでいる。本州ではとても見られない風景に満足した。どうかこの自然美をいつまでも願う。夕方、札幌に着く。

道庁の所在地だけに都会的である。ユースホテルに宿泊したのが変化があつて良かった。明日は市内見物である。この夜は友と連れだつて、サツポロビールをちよつぱり(?)味わう。さすが本場だけにおいしい。その後、90メートルのテレビ塔展望台から夜景を眺め、大通り公園をぞろぞろと、焼きたて、蒸したてのとうもろこしを食べながら散歩しやれこんだのが楽しい思い出となつている。

朝食は和食だつたのに牛乳が添えられていて、やつぱり北海道だな、と感じたこと。町で買ったサクランボが艶々して大きくて赤くて、とても甘かつたこと。夕食に珍らしく野菜がどつさりついていて喜んだことを最後につけ加えておこう。



## 札幌 → 層雲峡

4班 短食2の1,2  
(小林, 木村, 大年, 岸山)  
(戸室, 松沢, 藤村, 玉尾)

7月19日(第5日目)

本日のコース札幌市内一月寒一層雲峡。

大体において札幌の町は夜の方が趣きがある。前夜、トウモロコシの匂いで一杯だつたテレビ塔前的大通りも、昼間見ると上品ぶつていかにもとつつきにくい様子をしている。こんな所は早く通りぬけて植物園へ。

この植物園、京都のそれよりも規模は小さいが高山植物コーナーがあつたり、京都では見られないような樹々が多くあつた。園内に博物館があつて、熊に噛まれて切断した人の腕だとか、熊の胃の中にあつたアルミの弁当箱なんぞが陳列してある。しかしまあ、この熊もお腹の中で消化の悪い弁当箱とお菜入れがぶつかつて、ガラガラ音がした時はずいぶん驚いたことだろう。ここではもつとゆつくりしていたかつたが制限時間一杯で高山植物園から引っぱり出された。出口で黒ゆりの球根を3つ100円で売っていた。

次に北大のクラーク博士の像の前で記念写真を取つた。Girls be ambitious/名物のポプラ並木も見せてもらえないので、ここの所は書かないことにする。

雪印工場も見学したが、見学の団体がワンサといて、案内嬢がマイク片手に説明するのを聞きながら工場内を一巡して、一個20円也のアイスクリームをもらつてサヨウナラを